

# 天心の思い描いたもの

ほかしの彼方へ

■3■

「実に素晴らしき色を主として描く「歴史彩である」。岡倉天心画」にあつて、武山をしてこう言わしめたは、炎そのものを主人という木村武山の「阿公にして、あたかも映画劫火」は、1907画の一場面のような臨年の第1回文部省美術場感を実現した。天心展覧会に出品され、3の指示に従い、横山大等賞を受賞した彼の会観、下村観山、菱田春心作である。秦の始皇草という3人の先輩と帝が造営し、その死後ともに北茨城市の五浦敵軍に焼き払われたとに転居した武山だったという「史記」の記述に、他の3人が東京美基つき描かれた「歴史術学校ですでに教壇に画」だが、天心が言う立ち、海外遊学などを

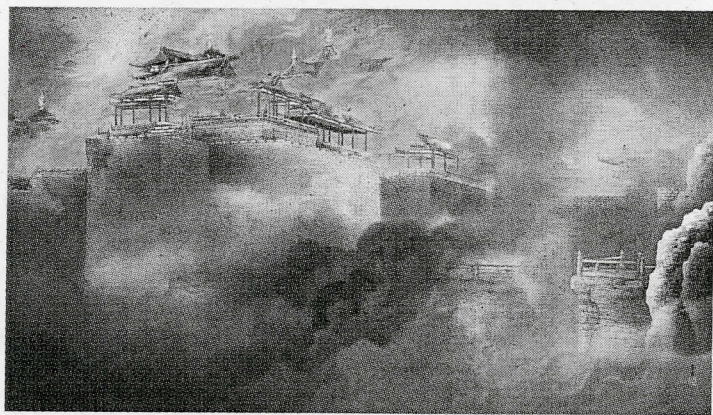
ように、この絵でまず目に飛び込んでくるのは、豪壮な大宮殿を焼きつくす紅蓮の炎の鮮烈な色彩だろう。

は、さしたる成果を得ていたとはいえず、天その期待に応えるため心の言葉は彼の胸に響

## 炎が主人公、臨場感実現

「天心の思い描いたものーほかしの彼方へ」は21日まで、県近代美術館で開催。問い合わせは同館029(243)5111。

### 木村武山「阿房劫火」



木村武山「阿房劫火」  
1907年、絹本・彩色  
・軸装、県近代美術館蔵  
いたに違いない。

ただし、先の実の言葉には続きがあつて、「そしてこうこうたる大音響が聞こえないだろうか。この絵にして音が聞こえたなら実に天下の名作であるが」というのである。武山の本当の努力はここから始まると言つてよい。(県近代美術館企画課長 小泉淳一)